

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第71集

馬越北山古墳群 (I)

馬越北山19号墳

2002年12月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第71集

まごしきたやまこふんぐん
馬越北山古墳群 (I)

馬越北山19号墳

2002年12月

豊橋市教育委員会

例 言

1. 本書は、豊橋市石巻本町字北山17番地の1において、原石採取工事に伴い事前に実施した馬越北山古墳群の発掘調査報告書である。発掘調査は平成14年6月17日から6月28日まで行い、調査面積は140㎡である。
2. 発掘調査は、中部採石工業株式会社が豊橋市教育委員会に委託して行い、小林久彦（教育部美術博物館）が調査を担当した。なお、発掘調査・報告書作成にかかる経費はすべて中部採石工業株式会社が負担した。
3. 発掘調査に際して、事業者である中部採石工業株式会社をはじめ、土地所有者や地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。また、本書の執筆に際しては、須川勝以氏（一宮町教育委員会）にご教示を頂いた。
4. 報告書の作成については、井上佳子・小出豊の援助を受けた。写真撮影については小林が行った。
5. 本書の執筆は、第3章2. Aを岩瀬彰利（教育部美術博物館）が行い、これ以外の執筆及び編集は小林が行った。
6. 本書に使用した方位は磁北である。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地 1
- 2. 歴史的環境 2

第2章 調査の経過と目的

- 1. 調査に至る経過 5
- 2. 調査の経過と目的 6

第3章 馬越北山19号墳の調査

- 1. 19号墳の概要 7
- 2. 出土遺物 11

第4章 まとめ

- 1. 終末期の小型横穴式石室 14
- 2. 馬越北山19号墳下層の状況 15

- 報告書抄録 16

挿 図 目 次

第1図	馬越北山古墳群周辺地形図 (1/20,000)	1
第2図	馬越北山古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第3図	馬越北山古墳群分布図 (1/5,000)	4
第4図	調査区位置図 (1/2,500)	5
第5図	調査区周辺地形図 (1/300)	7
第6図	調査区全体図 (1/100)	8
第7図	馬越北山19号墳実測図 (1/30)	9
第8図	馬越北山19号墳石室実測図 (1/30)	10
第9図	出土遺物実測図-1 (1/3)	12
第10図	出土遺物実測図-2 (1/3)	13
第11図	三河地域の小型横穴式石室 (1/50)	14

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	13
-----	---------------	----

写真図版目次

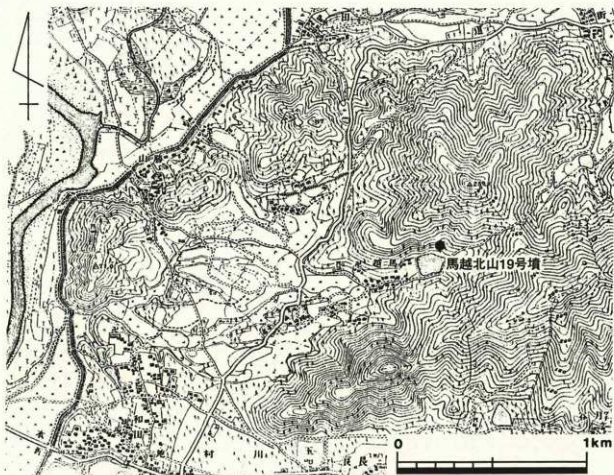
1-1	調査区遠景-1 (南西から)	2	調査区遠景-2 (南西から)
3	試掘調査6トレンチ (東から)	4	試掘調査3トレンチ (西から)
5	試掘調査4トレンチ (南から)		
2-1	調査前全景-1 (南から)	2	調査前全景-2 (南から)
3	調査区西壁土層断面-1 (東から)	4	調査区西壁土層断面-2 (東から)
5	19号墳検出状況 (南から)	6	石室検出状況 (南から)
3-1	石室内埋土 (南東から)	2	石室全景-1 (南から)
3	石室全景-2 (東から)	4	作業風景 (南から)
5	調査区全景 (南から)		
4-1	調査区全景 (西から)	2	石室奥壁 (南から)
3	石室完掘状況 (南から)	4	石室側壁-1 (西から)
5	石室側壁-2 (東から)		
5-1	石室基底石-1 (南から)	2	石室基底石-2 (南から)
3	奥壁裏込め状況 (東から)	4	石室基底石取り外し後 (南から)
5	出土遺物 (古墳築造前)	6	出土遺物 (古墳築造以降)

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1図)

馬越北山古墳群が所在する豊橋市の北東部では、静岡県との境をなしている弓張山系が北から南へと続き、そこから派生するいくつかの丘陵が西に向かって延びている。そして、それぞれの丘陵に挟まれるようにして大小の谷底平野が形成されている。馬越北山古墳群は、このうちの比較的小さな谷底平野を臨む丘陵の南向き斜面に立地している。この平野は、小河川である馬越川によって開削され、南西に開けた形状となっている。また、馬越川の上流には溜池(大池)が築かれている。

地質的に見ると、当地域周辺は豊川にほぼ沿うように走る中央構造線の外帯にあっている。外帯ではチャート・頁岩・砂岩・石灰岩などからなる秩父古生層や、輝緑岩・ハンレイ岩等の塩基性岩類や片岩類からなる三波川変成岩類が帯状に連なっており、所々でこうした石材の露頭も見られる。周辺古墳の石室や外表などに使用された石材の多くは、このような露頭部分からの調達と考えられる。また、石灰岩や輝緑凝灰岩などは、近代以降に土木用・工業用の採掘対象とされ、石巻平野町や高山町などでは丘陵が大きく削られた場所も見られる。



第1図 馬越北山古墳群周辺地形図 (1/20,000 明治23年 大日本帝國陸地測量部より)

第1図の明治23年作製の地形図に見られるように、馬越北山古墳群の北側には標高260m程の「日名倉山」が存在していた。しかし、長年の原石採取によってその面影はほとんど見られない。近年では、原石採取はさらにその周辺にまで及び、平成5年度に発掘調査された上寒之谷1号墳も、こうした原因によるものであった。

2. 歴史的環境 (第2・3図)

馬越北山古墳群周辺の遺跡の概要及び馬越北山古墳群の詳細について述べていくことにする。

縄文時代 嵩山蛇穴遺跡、立岩遺跡など石灰岩洞窟を利用した早期の遺跡が知られている。また中期以降では批把遺跡(9)、玉川変電所遺跡(10)、木の根遺跡(11)、多り畑遺跡などが確認されており、いずれも台地上に立地している。

弥生時代 豊川に面した段丘縁部では、前期の白石遺跡や中～後期の高井遺跡などの環濠を伴う集落跡が知られている。また丘陵縁部や谷底平野部では、奈木4号墳下層(13)で弥生前期の堅穴住居が確認されたり、嵯峨遺跡(8)や批把遺跡(9)などで弥生土器片が採集されているが、内容が明らかな遺跡は少ない。

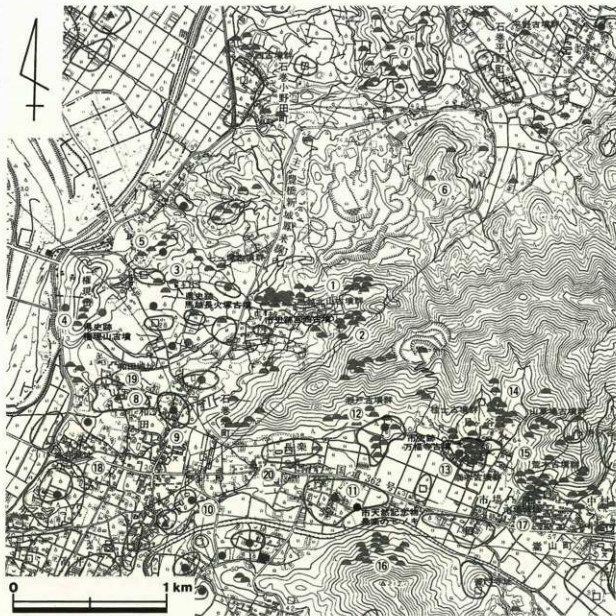
古墳時代 前期及び後期の古墳は数多く確認されているが、集落跡については多り畑遺跡、白山Ⅱ遺跡、西屋敷Ⅰ遺跡などわずかで、いずれも後期の孤立柱建物や堅穴住居、土壘などが検出されている。また、馬越長火塚古墳近くの山崎遺跡や欠ノ上遺跡でも堅穴住居や土壘などが検出されており、後期の集落跡が確認されている。

豊川に面した丘陵上には、前方後円墳である権現山1号墳や同2号墳(4)、前方後方墳の勝山1号墳(5)や茶白山1号墳など前期の首長墳が継続的に築かれているが、中期古墳の存在は確認されておらず一時的な断絶が見られる。後期には、全長65m以上の前方後円墳で国造級と考えられる馬越長火塚古墳(3)が築造される。これ以外の古墳は、ほとんどが小規模な円墳で、いわゆる群集墳と呼ばれる形態となる。馬越北山古墳群(1)をはじめ、瀬戸古墳群(12)・奈木古墳群(13)・荒木古墳群(15)などは丘陵の南側斜面に築かれている。一方、馬越南山古墳群(2)や山八ツ田古墳群(16)などは丘陵の北側斜面に築かれている。

古代～近世 古代では、西屋敷Ⅰ遺跡や権現山周辺の別所遺跡・北入田遺跡などで7～8世紀の遺物が確認され、馬越長火塚古墳すぐ東の元屋敷東遺跡では8～9世紀の集落跡が確認されている。

中世では西郷氏の居城であった月ヶ谷城址や市場城址(17)があり、また月ヶ谷城の下屋敷であった下角庵遺跡などが確認されている。嵯峨遺跡(8)などでも、灰軸系陶器・土師器などが採集されており、何らかの遺跡の存在が予想される。この他、左京殿城址や高井城址(18)、和田城址(19)などの城館がこの谷底平野に集中しており、近世本坂道以前から交通の要所としてこの地域が重要視されていたことが十分に考えられる。

西野石灰焼窯址(20)については、江戸末期～明治30年代に操業された窯で、石灰石を焼成して石灰を取り出すためのものである。石灰窯は、江戸後期以降小規模なものがこの周辺に築かれようになり、当初は露頭から石灰岩を採掘していたようである。



- | | | | |
|-----------|------------|-----------|------------|
| 1 馬越北山古墳群 | 2 馬越南山古墳群 | 3 馬越長火塚古墳 | 4 椎現山古墳群 |
| 5 勝山1号墳 | 6 上寒之谷1号墳 | 7 二本松古墳群 | 8 嵯峨遺跡 |
| 9 枇杷遺跡 | 10 玉川変電所遺跡 | 11 木の根遺跡 | 12 瀬戸古墳群 |
| 13 奈木古墳群 | 14 桂土古墳群 | 15 荒木古墳群 | 16 山八ツ田古墳群 |
| 17 市場城址 | 18 高井城址 | 19 和田城址 | 20 西野石灰焼窯址 |

第2図 馬越北山古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000)

馬越北山古墳群

馬越北山古墳群は、弓張山系から西に派生した丘陵の南向きの斜面に東西約800mにわたって分布しており、宮西古墳を含めて22基の古墳が確認されている（第3図）。なお、大池を挟んだ北向きの斜面には馬越南山古墳群（9基）が分布している。

古墳群については、宮西古墳と今回の馬越北山19号墳以外は本格的に調査が行われておらず詳細は

不明であるが、基本的には横穴式石室を内部主体とする円墳で構成されている。なお、13号墳と19号墳の約300m間では古墳が確認できず、ここを境に東西の支群に分けることも可能である（注1）。また東側に築かれた14～19号墳については、その間に小さな谷が存在しており14・19号墳と15～18号墳の2群に分けられる可能性もある。

古墳群中では、宮西古墳が石室規模において最大級であり、盟主的な位置にあったものと考えられる。宮西古墳は、直径12m、高さ2mで墳丘規模はそれほどでもないが、石室は全長6.7m以上、高さ2.75mを測り、近接する馬越長火塚古墳の後室にも匹敵する。他の古墳は、直径10～20m程度で、石室規模の明らかなものはほとんど無い。



第3図 馬越北山古墳群分布図（1/5,000）

注1 馬越北山古墳群のうち、14号墳～19号墳については今回の開発行為による事前踏査によって新たに確認したものである。約300m間の未確認部分で今後発見される可能性もあると考え、古墳の命名は馬越北山古墳群からの継続番号とした。その後、平成13年度の詳細分布調査で西支群において新たに20・21号墳が発見されたが、東西の間を埋める古墳は発見されていない。

参考文献

- 豊橋市教育委員会 1993 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第16集 上乗之谷1号墳」
- 豊橋市教育委員会 1993 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第17集 古墳測量調査（I）」
- 豊橋市教育委員会 2002 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第64集 西野石灰焼窯址」
- 豊橋市教育委員会他 2002 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第68集 馬越地区遺跡範囲確認調査」
- 愛知県立時習館高等学校歴史同好会 1980 「宮西古墳」

第2章 調査の経過と目的

1. 調査に至る経過 (第4図)

今回の発掘調査は、事業者である中部採石工業株式会社から原石採取を目的とした工事計画があり、平成8年11月15日付けで埋蔵文化財所在の有無及びその取り扱いについての照会があったことに始まる。照会を受けた当教育委員会では早速現地踏査を行い、照会対象地には馬越北山14号墳が、またすぐ隣接した場所には同15～18号墳がそれぞれ所在していることを確認した。また、これらの古墳から少し離れた場所では古墳状の高まりが3カ所確認できた。このため事業者には、対象地には遺跡が所在し、工事を行う場合には文化財保護法57条2に基づく埋蔵文化財発掘の届出が必要であるとの回答を平成9年1月10日付けで行った。

平成9年1月20日には埋蔵文化財発掘の届出が事業者から提出され、これに基づいて同年4月14～16日に試掘調査を実施した。なお、14号墳については、開発地の隅にあることから緑地として保存できることとなった。試掘調査では、古墳状の高まりが確認された部分を中心に8カ所トレンチを設定(第4図)し、これ以外にも図の範囲外に9カ所のトレンチを設定した。この結果については、平成9年4月22日付けで報告を行っている。古墳状の高まりに設定した3トレンチ(3T)と4トレンチ(4T)で、馬越北山19号墳を新たに発見した。また、14号墳との間には1T・2T・5T・6Tを



第4図 調査区位置図 (1/2,500)

設定したが、遺構・遺物は確認できていない。8Tも古墳状の高まりと見えた部分に設定したが、遺構は確認できず土師器片がわずかに出土した程度である。なお、図範囲外の試掘調査（9～17T）でも、遺構・遺物はまったく確認できなかった。

新たに発見された馬越北山19号墳については、工事計画を変更して保存することが難しいため発掘調査を実施して記録保存に留めることとなった。発掘調査は、原石採取工事の進捗状況に合わせながら、平成14年5月1日に事業者と市教育委員会との間で委託契約を結び、6月17日より開始した。

2. 調査の経過と目的

今回の調査対象は、馬越北山19号墳であるが、事前の試掘調査（3・4トレンチ）ではわずかながら条痕文土器などが出土していたため、古墳の周囲を多少広げて約140㎡を調査範囲とした。調査の目的は、馬越北山19号墳の全容解明及び周辺状況の把握である。

樹木等の伐採は事前に行われていたため、6月17日より平板による調査前の地形測量及び重機による表土剥ぎを行う。試掘調査によって石室の所在は明らかであるが、墳丘や外表施設などの状況を把握するため、石室に隣接した部分は人力で表土を剥いでいく。

重機による表土剥ぎ後に、調査区北壁と西壁の精査・断ち割り・実測等を行い、淡褐色砂質土（礫混じり）層（＝2層）および黒色砂質土層（＝3層）の掘り下げを行う。縄文土器・条痕文土器は、基本的に3層から出土しているが、明確な遺構は確認されなかった。これらの遺物については上部からの流入と推測されたが、調査範囲を広げてまで解明することはできなかった。

6月19日からは、19号墳の横穴式石室の検出・実測を開始する。石室については、3層を掘り込んで構築していることが断ち割りなどから確認できたが、明確な床面や墳丘盛土と考えられるものははっきりしない。また6月20日からは、19号墳と14号墳との位置関係を明らかにするため、14号墳を含めた地形測量も同時に行っていく。さらに、15～18号墳との位置関係や各古墳の規模などの把握にも努めた。

途中降雨などによる中断もあったが、6月26日からは石室の解体・断ち割り・実測などを行い、28日には現地での作業をすべて終了し、道具の撤収を行った。

第3章 馬越北山19号墳の調査

1. 19号墳の概要 (第5～8図)

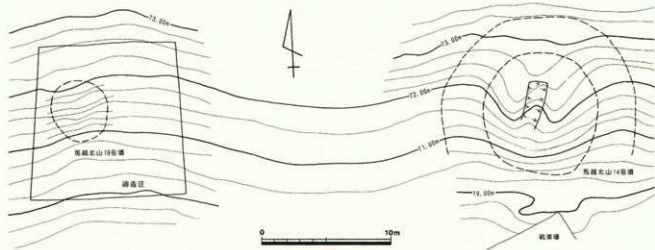
A. 調査前の状況

19号墳は、当初周囲に比べてわずかに高まりが見られるだけで、試掘調査で石室の一部が確認されるまではその存在は不確かなものであった。

周囲の樹木伐採後に現状の地形測量(第5図)を行い、19号墳は標高71mあたりの緩やかな丘陵斜面上に位置していることが明らかとなった。谷底平野部との高低差は20m程を測るが、谷の奥部に位置しているため古墳からの眺望は極めて悪い。

古墳付近では12.5cmコンターで地形測量を行ったが、付近のコンターがわずかに乱れる程度で、直径3～4m程の非常に小規模な円墳であったと推測される以外、古墳の高さや周溝の有無についてはまったく不明である。なお、試掘調査前に既に露出していた石材の一部には、その後の調査で石室の立柱石にあたることが分かったものもあり、盛土流出の著しいことが改めて確認された。

14号墳については、東へ35m程離れたほぼ同じ標高の場所に築かれている。古墳の背後部には、地山を削り出したと思われる周溝も確認できる。墳形は円墳で、規模は直径9m程、高さは2m程が残り、周溝幅は2～3mを測る。墳丘中央部が細長く陥没して一部石材も露出しており、南方向に開口した横穴式石室を有する可能性が高い。なお、すぐ南側には戦車塚が掘り込まれているが、古墳にはほとんど影響はない。



第5図 調査区周辺地形図(1/300)

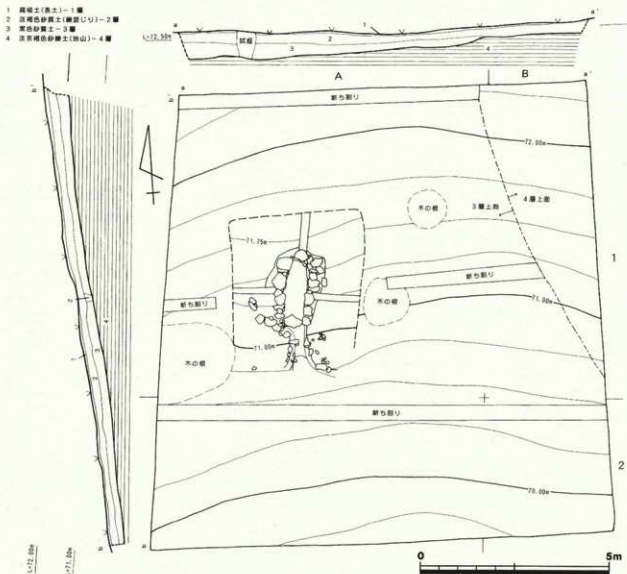
B. 墳丘

第6・7図には表土剥ぎ後の状況を示したが、墳丘をはっきり捉えることはできない。調査区内の地形を細かく見ると、北東部では黒色砂質土(3層)の堆積は見られず、中央部分を中心に谷状にわずかに窪み、厚さ20～40cmの黒色砂質土が堆積している。そして、その上には淡褐色砂質土(2層)

が20cm程の厚さで調査区全体に堆積している。

第6図では、石室の周囲2m程を四角く残して腐植土(1層)のみを取り除き、その他は地山面及び3層上面を検出した状況を示している。このため石室の周囲は10~20cm程高くなって見えるが、2層上面の状況であって墳丘の盛土ではない。第7図の墳丘断面図にもあるように、2層及び3層以外の土層が堆積していないことから、墳丘の盛土は遺存していないことが分かる。周溝については、2層や3層を掘り込んだ状況も確認できないため、当初から存在しない可能性が高い。

石室の前面西側では、表土を取り除いた段階で30~40cm大の石材が5点ほど並ぶように検出された。石材はいずれも輝緑凝灰岩で、置き方には規則性は見られないが、平面的にはやや弧を描くように見える。これら石材は、墳丘の状況がはっきりしないため明確ではないが、石室の入口部につながる位置にあることから墳丘の外側を巡る石列の一部と推測される。この場合、復元される古墳の直径は3.2m程度となる。なお石列を墳丘内石列と考えた場合は、墳丘はやや大きく直径5~6mとなろう。

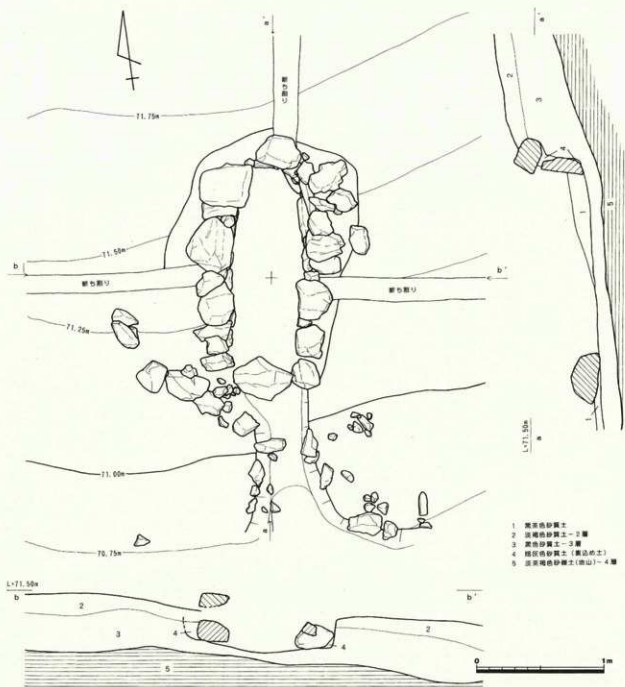


第6図 調査区全体図 (1/100)

C. 主体部

試掘調査によって石室の側壁部分が検出されていたため、主体部の規模はおよそ推測することができた。石室内を徐々に掘り下げていくと、転落したと考えられる石材が数点検出されたが、天井石と考えられるようなものは見つかっていない。埋土は黒茶色砂質土であるが、床面となる黒色砂質土との違いはほとんど見られない。なお、石室の左右については、奥壁から入口を見た場合を指す。

主体部は、ほぼ南に開口する横穴式石室で、主軸方位は $N-7.5^{\circ}-E$ を測る。石室は、玄門を有する擬似両袖型のもので、遺体を納めた玄室と墳丘外と石室をつなぐ墓道とで構成されるが、明確に羨道と認識できる部分は確認できない。



第7図 馬越北山19号墳実測図 (1/30)

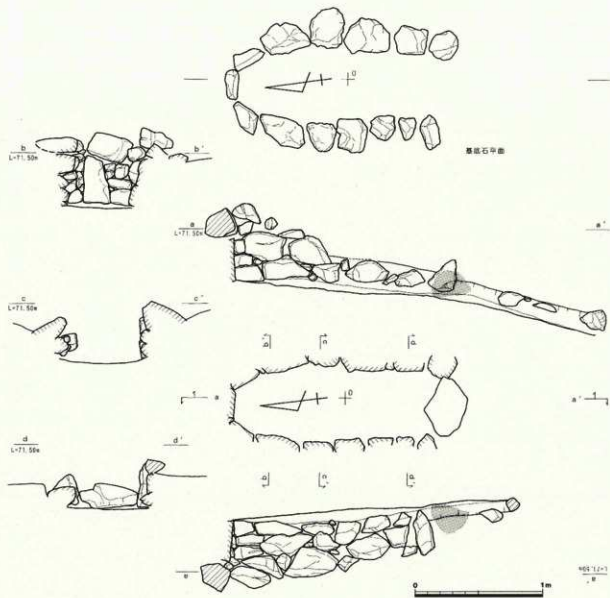
本来羨道は、天井石・側壁を有し、そこで閉塞を行う部分とされる。19号墳においてはこうした施設が省略されたと考えられ、玄門から続く墓道部分で閉塞行為を行っていた可能性が考えられる。

石室規模は以下のようである。

全長	1.75m	玄室幅 奥壁部	0.24m	最大	0.6m	玄門付近	0.53m
玄室長	1.5m	玄室高 奥壁部	(0.58m)	最大	(0.62m)		

石室平面形は、両側壁が直線的で奥壁近くで急に窄まる「奥窄まり長方形」(注1)を呈する。奥壁は、縦長の1石(0.4×0.24m)がほぼ垂直に置かれ、その上には横長で側壁にも架かる1石が確認できる。床面には敷石などの造作は見られず、やや硬くなった部分を床面と考えた。床面は比較的平坦であるが、入口に向かってわずかに低くなっていく。

側壁は、最大で4段の石積みが遺存しているが、目地などは観察できない。石材の小口面を内側に



第8図 馬越北山19号墳石室実測図(1/30)

向けたものが多いが、基底石などには横口面を内側に向けたものも見られ、奥壁と立柱石との間を単に埋めたという感が強い。石材は20~40cm大のものを中心としているが、下段ほど石材が大きいという訳ではない。側壁の壁面は、いずれも垂直あるいはわずかに内傾する程度である。

石材の裏込めには暗灰色砂質土や黒色砂質土が使用されており、3層とした黒色砂質土層とほとんど見分けがつかない。石室の堀方についても、2層・3層を掘り込んでいることは分かるが、平面や断面で明確に確認することはできなかった。また基底石についても、3層を掘り込んでからその上に配置したようであるが、特別な造作は見られない。

玄門には、高さ25cmと36cmの立柱石が置かれ、側壁より3~5cm程内側に突出している。またそれぞれの立柱石は、奥壁からの距離が左右で10cm程ずれている。なお左側の立柱石については、上部が墓道側へ多少傾いている。また立柱石間には、闕石状の閉塞を兼ねたと考えられる石材が置かれている。大きさは幅45cm、高さ22cmで、立柱石間をちょうど塞ぐように収まっている。

墓道は、左側壁が途中で屈曲した後は直線的に延びているが、事前の試掘調査と重複したため不確かとなった部分もある。規模は長さ1.15m、幅0.4~0.6mで、断面は浅い皿状となり、深さは10cm前後を測る。墓道の両側には10~20cm大の石材が散在しているが、これが墓道に伴うかははっきりしない。またこれ以外に墓道内には小石材が見られたが、閉塞石であるかは不明である。

なお石室の使用石材は、すべて輝緑凝灰岩の角礫である。当丘陵地を中心に多く産出するものであり、周囲の露頭から運ばれたものであろう。また、古墳に伴う遺物については、石室内からはまったく出土せず、石室の前面あたりの表土から須恵器片がわずかに出土した程度である。副葬品が少ない時期の古墳であるためとも考えられ、また付近で灰軸系陶器等が見られることから比較的早い時期の盗掘を受けた可能性も推測されよう。

2. 出土遺物 (第9・10図、第1表)

今回の調査では、腐植土層(表土=1層)、淡褐色砂質土(礫混じり)層(=2層)、黒色砂質土層(=3層)から縄文土器、条痕文土器、須恵器、灰軸系陶器、土師器等が出土しているが、古墳などの遺構に伴う遺物はみられない。そのため、ここでは古墳築造の前後で、遺物の種類毎に分けて説明する。

A. 古墳築造前の遺物 (第9図・第1表)

古墳の墳丘下に広がる黒色砂質土層を中心に縄文土器、条痕文土器が少量ではあるが出土している。条痕文土器については、榎王式までを縄文時代と扱い、水神平式以降を弥生時代と扱う。

縄文土器 (1~4)

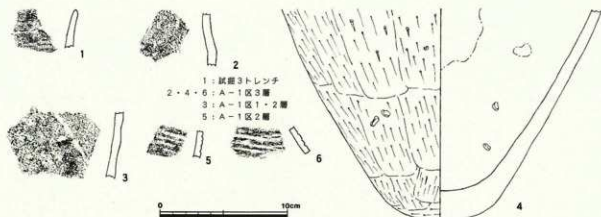
1は粗製深鉢の口縁部破片である。口縁部はわずかに外反しており、端部はやや丸みを帯びている。調整は摩滅していて判別し難いが、外面は施文具が巻貝と思われる条痕文が施されており、内面はナデである。時期は後期後葉~晩期中葉のものと思われる。2は、いわゆる突帯文系土器の精製深

鉢の肩部破片である。肩部は段をなしておらず、緩やかではあるが稜が認められる。調整は外面頸部は板ナデ、胴部は削痕、内面は板ナデである。時期は晩期後葉五貫森式～馬見塚式のものと思われる。3は粗製深鉢の体部破片であるが、外面に指押さえ痕が明瞭に認められるものである。調整は外面削痕、内面は摩滅で不明である。時期は晩期中葉～後葉のものと思われるが、晩期中葉稲荷山式の可能性が高い。4は深鉢の胴部～底部破片である。底部はいわゆる丸底で、底部から胴部にかけてやや直線的に広がっている。調整は外面削痕、内面ナデである。内面の底から10cmの辺りに炭化物が付着している。時期は晩期後葉五貫森式～馬見塚式のものと思われる。

条痕文土器 (5・6)

5は深鉢・甕または壺の体部破片であり、外面に半截竹管による条痕文が施されている。内面はナデである。時期は縄文時代晩期末葉樫王式～弥生時代中期続水神平式のものである。

6は壺の肩部破片である。外面には半截竹管による羽状の条痕文が施され、内面はナデである。時期は弥生時代前期水神平式～中期続水神平式と思われる。



第9図 出土遺物実測図一 (1/3)

B. 古墳築造以降の遺物 (第10図・第1表)

古墳に明確に伴うものは存在しないが、わずかに1点のみ出土した須恵器片については古墳に伴った可能性が高い。灰釉系陶器や土師器はこれ以降のものである。なお、出土層位が2層とした8・9については、2層上面あるいは混入と考えられる。

須恵器 (7)

7は、体部が内湾気味に緩やかに立ち上がる。調整は、体部外面下半が回転ヘラケズリ、これ以外には回転ナデである。内面下半に自然釉の付着が見られることなどから、比較的広口の壺類あるいは瓶類の体部と推測される。

灰釉系陶器 (8・9)

8・9はいずれも碗の口縁部破片であり、8は、口縁端部が外方にさらに外反する。また、9は端部内面にわずかに段を有する。調整は、内外面ともに回転ナデである。なお8については、口縁部内面には灰釉がみられ、12世紀中葉頃に位置付けられるものであろう。

土師器 (10・11)

10は、坏あるいは皿の口縁部破片で、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部は丸く収める。調整は、内外面が丁寧なヨコナデとなり、丹塗りとなる。丹塗りの土器は、東三河地域では少なく西遠江地域に多く見られる。8世紀代に位置づけられよう。

11は、いわゆる半球型の内耳鍋で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は平坦な面となる。調整は、口縁部ヨコナデ、体部内面板ナデ、外面指押さえである。16世紀代のものであろう。



第10図 出土遺物実測図-2 (1/3)

第1表 出土遺物観察表

遺物No.	地区・遺構	器種・分類	口径 器高 底径	胎土	焼成	色調	調整	備考
9-1	試験3 T	J 深鉢		密	良好	赤褐色	外面条痕、内面ナデ	
2	A-1 3層	J 深鉢		密	良好	茶褐色	外面板ナデ・削痕、内面板ナデ	
3	A-1 1・2層	J 深鉢		密	良好	茶褐色	外面指押さえが残る以外磨滅	
4	A-1 3層	J 深鉢	(15.3)	密	良好	茶褐色	外面削痕、内面ナデ	内面に炭化物
5	A-1 2層	J 深鉢?		密	良好	淡褐色	外面条痕、内面ナデ	
6	A-1 3層	J 壺		密	良好	淡褐色	外面条痕、内面ナデ	
10-7	A-1 1・2層	S 不明		密	良好	暗灰色	外面回転ナデ及び回転ヘラケズリ	
8	A-1 2層	P 碗	(3.1)	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	内面に灰釉
9	A-1 2層	P 碗	(2.5)	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
10	A-1 1・2層	H 坏	(2.3)	やや粗雑	良好	暗褐色	内外面ヨコナデ	内外面丹塗り
11	試験8 T	H 鍋	(3.8)	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	

* J-縄文土器・奈良文土器 S-須恵器 P-灰輪系陶器 H-土師器

法量の単位はcm。()は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。

注1 森 泰通 1999 「西三河の終末期古墳小考」『三河考古』第12号

第4章 まとめ

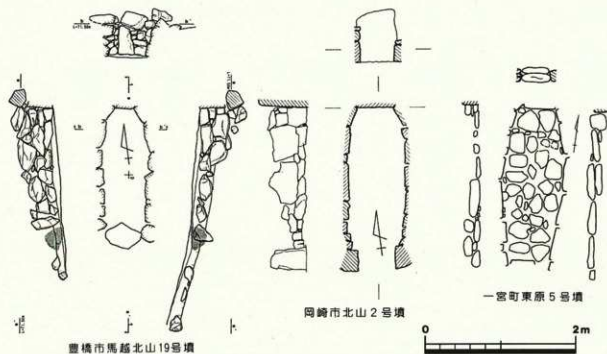
1. 終末期の小型横穴式石室 (第11図)

馬越北山19号墳は、径3～4mの非常に小規模な円墳と推定され、主体部には全長1.75mの横穴式石室を有することが明らかとなった。副葬品がまったく出土していないため築造時期を類推することは非常に難しいが、古墳の立地や石室形態・規模などから考えれば7世紀末～8世紀初頭頃の築造と推察され、いわゆる終末期古墳に位置付けられよう。

馬越北山古墳群の形成において、西支群は宮西古墳の築造を契機に造墓活動が始まったと考えられるのに比べ、東支群は最も谷底平野の奥まった部分に位置することもあり造墓時期はそれより遅いと推測される。また、東支群でも14・16～18号墳は径8～9mで墳丘も比較的高さがあることから、19号墳に先行して築かれた可能性が高い。古墳の立地や規模からすれば、19号墳は馬越北山古墳群において最後に築かれた古墳の一つであろう。

19号墳の石室は、非常に小型であることが特徴である。実際の利用空間となる玄室長は1.5mで幅は最大で0.6mを測り、伸展葬の場合成人1人でもぎりぎりとなろう。ちなみに、鉄釘が出土していないことから、木棺は使用されていない可能性が高い。玄室規模からすると、追葬が否定された構造と考えられる。しかしながら、横穴式石室の基本的な形態は残っていることから、小石室ではなく小型横穴式石室(注1)として位置付けられよう。

三河地域における小型の横穴式石室例は少ないが、一宮町東原5号墳(全長2.2m、幅最大0.8m)



第11図 三河地域の小型横穴式石室 (1/50)

や、岡崎市北山2号墳（全長2.1m、幅最大0.7m）などが該当しよう。このうち、東原5号墳は石室平面形が無袖頰の胴張り形、北山2号墳は馬越北山19号墳と同様の形態となる。

馬越北山19号墳や北山2号墳は、羨道が極端に省略され石室が「奥窄まり長方形」（注2）より小型化していることから、「奥窄まり長方形」と「小石室」の中間の「横穴式小石室」として位置付ける考え方もある（注3）。ただ、形態的には羨道が省略された点を除けば「擬似両袖+奥窄まり形」（注4）あるいは「奥窄まり長方形」の範疇に収まるものである。

東三河の終末期古墳は、擬似両袖+奥窄まり形の石室が主流を占めている。この形態の石室は、西三河地域や尾張地域にも広く分布し、この形態の導入をもって終末期が始まるとされる（注4）。また、石室の小型化・羨道の縮小化への方向性は、他の形態と同様に単純ではないが大局的にはそうした傾向が指摘できる。擬似両袖で奥窄まり長方形という基本的な形態を残しながら羨道が省略されてしまう馬越北山19号墳や岡崎市北山2号墳は、擬似両袖+奥窄まり形（奥窄まり長方形）石室の最終形態と見ることができよう。

2. 馬越北山19号墳下層の状況

馬越北山19号墳以外では、その下層である黒色砂質土層（3層）中より縄文土器・条痕文土器が出土している。これらの土器については、それに伴う明確な遺構は検出されておらず、上部からの流れ込みと考えられる。但し、古墳より上部は急傾斜となり、規模の大きな遺構が形成されていた可能性は低い。

馬越北山19号墳のある丘陵の南側には、それと同様な立地条件の奈木古墳群があり、奈木4号墳の調査では、その下層より水神平式期の竪穴住居が検出されている（注5）。これまであまり調査が及んでいないこのような丘陵斜面は、条痕文期の遺跡において良好な立地条件にあったと考えられる。馬越北山19号墳下層周辺や奈木4号墳下層では、小規模ではあるが縄文晩期～弥生前期の居住域が存在する可能性が推測されよう。

注1 ここで言う「小石室」は、いわゆる竪穴系となるもので、単葬かつ単次葬の墓あるいは改葬の手順を踏んだ複次葬の墓である。また小型横穴式石室については、「横穴式小石室」と呼んでいるものも含むが、横穴式石室との大小の区分は明確ではない。

注2 森 泰通 1999 「西三河の終末期古墳小考」『三河考古』第12号

注3 松井直樹 2000 「尾張・西三河における古墳終末期の様相」
『プレフォーラムⅠ 古墳の終末』 三河古墳研究会

注4 須川勝以 2000 「東三河における終末期の様相」『プレフォーラムⅠ 古墳の終末』
三河古墳研究会

基本的に「擬似両袖+奥窄まり形」と「奥窄まり長方形」はほぼ同様の形態である。

注5 豊橋市教育委員会 2001 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第56集 奈木4号墳ほか」

挿図出典 北山2号墳：新編岡崎市史編纂委員会 1989『新編岡崎市史 史料 考古下16』

東原5号墳：三河考古学談話会 1994 「東三河の横穴式石室 資料編」三河考古第6号

報告書抄録

ふりがな	まごきたやまこふんぐん (1)							
書名	馬越北山古墳群 (I)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	小林 久彦 岩瀬 彰利							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1 TEL 0532-51-2879							
発行年月日	西暦2002年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まごきたやま 馬越北山 こふんぐん 19号墳	まごきたやま 豊橋市石巻本 町字北山17-1	23201	79924	25度 97分 00秒	132度 80分 00秒	20020617 ～ 20020628	140㎡	原石採取 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
馬越北山19号 墳	古墳	古墳	横穴式石室 1基		須恵器 縄文土器 条痕文土器 灰釉系陶器			

写 真 图 版

写真図版1

1. 調査区遠景-1 (南西から)



2. 調査区遠景-2 (南西から)



3. 試掘調査 6トレンチ
(東から)



4. 試掘調査 3トレンチ
(西から)



5. 試掘調査 4トレンチ
(南から)



1. 調査前全景-1 (南から)



2. 調査前全景-2 (南から)



3. 調査区西壁土層断面-1 (東から)



4. 調査区西壁土層断面-2 (東から)



5. 19号墳検出状況 (南から)



6. 石室検出状況 (南から)

写真図版3



1. 石室内埋土 (南東から)



2. 石室全景-1 (南から)



3. 石室全景-2 (東から)



4. 作業風景 (南から)



5. 調査区全景 (南から)



1. 調査区全景 (西から)



2. 石室奥壁 (南から)



3. 石室完掘状況 (南から)



4. 石室側壁-1 (西から)



5. 石室側壁-2 (東から)

写真図版5



1. 石室基底石-1 (南から)



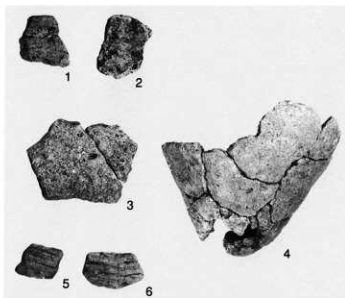
4. 石室基底石取り外し後 (南から)



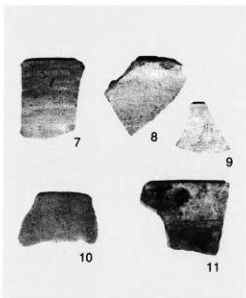
2. 石室基底石-2 (南から)



3. 奥壁裏込め状況 (東から)



5. 出土遺物 (古墳築造前)



6. 出土遺物 (古墳築造以降)

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第71集

馬越北山古墳群（Ⅰ）

2002年12月25日

発行 豊橋市教育委員会◎
美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 共和印刷株式会社